

自我概念を有しているとは

福田 敦史 (Atsushi Fukuda)
慶應義塾大学非常勤講師

自己意識が失われている事例として、アンスコムなど多くの論者が引用することで有名な、W・ジェームズの著作に出てくる次のような逸話がある。

私たちは馬車に乗って家路についていた。と、突然ドアが開き、そしてX氏
ボルディとしておこう が、道路に転げ落ちたのだ。私たちがすぐに引き上げると、彼は次のように言ったのだ。「誰か落っこちたのかい？」あるいは「誰が落っこちたんだい？」と。 私はその言葉を正確には覚えていない。ボルディが落ちたのだと教えられると、彼は「ボルディが落っこちたのかい？ かわいそうなボルディ！」と言ったのだ。

確かに、このボルディーは自己意識を有していない、と私たちには強く思われるだろう。だが、果たしてそれはどうしてなのだろうか。私たちは、この場面で何がボルディーに欠けているとみなすのだろうか。

ボルディーは、これまで一度たりとも自己意識を持ったことがないような存在者ではおそくないだろう。もし、一度も自己意識を持ったことがないのであれば、そもそも「消失・中断 lapse」とは言われまいだろう。また、このような自己意識の消失という事件があったからといって、これ以降ボルディーから自己意識的存在者としての資格が永久に剥奪されるようなわけでもない。これまで自己意識を有して存在し、これからも自己意識を有して世界を経験していくであろうボルディーが、この出来事の時には自己意識を失っていた、ということである。では、私たちはなぜボルディーがこの時、自己意識を失っていたと考えるのであろうか。

アンスコムの論文「一人称」では、この他にも、A使用者社会、あるいは感覚剥奪などの思考実験が論じられ、「私」という語についての検討を通して、自己ないし自己意識についての考察がなされている。最終的に「私」という語は指示語ではない、という結論が導かれているわけだが、ここではアンスコムの結論そのものの検討を直接の目的とはしない。いくつかの興味深い事例を通して、自己概念や自己意識を有する、ということについての考察を行ってみたいのである。

ところで、自己同定や自己指示についての考察において、例えば、エヴァンズなどの論者らは、自己指示やその特徴（例えば、「誤同定による誤りに対する免疫」など）が、心的なものについてばかりではなく、身体的なものについても成立する、ということを取り出してきた。同様に、反デカルト的とも呼べるような議論、すなわち、自己や人格（人間）の心的な側面ばかりでなく、自己の身体的な側面を強調するもの

も多くなっているように思われる。

人間の身体的な側面に着目するこうした議論は妥当なものと思われる。だが、重要な点は、単に、自己指示の際に、心的なものだけではなく身体的なものも指示している、ということにあるのではない。むしろ重要な点は、自己意識について言えば、自己意識を「自己についての意識」という定式化から離れ、「自己が世界に対してのことについての意識」と定式化したことにある。そして、自己が世界に対して存在しているありかたが、心的な存在の仕方であると同時に、身体的な存在の仕方である、ということなのである。自己は身体を有しているわけだが、単に身体を有しているということが重要なのではなく、身体的に世界に対している、ということが大切なことというわけである。

また、自己意識を「自己が世界に対していることについての意識」と捉える観点から同様に、自己が時間的に持続して存在している、ということも要請されることになると思われる。

自己意識について考察する際、デカルト的誘惑とでも名付けられるような傾向がしばしばある。これは、自己意識や自己指示の意識対象ないし指示対象を、いま現在のただいまの自己として探求する誘惑である。だが、これはやはり自己意識を「自己についての意識」と捉えてしまうことから来るものと思われる。

自己はその時に瞬間的にのみ存在して世界に対しているのではない。自己が時間的に持続しているということを受け入れなければ、たとえ現在なされる判断や、現在の経験であっても成立しないのではないか。このことは、先のアンスコムにおける感覚剥奪の思考実験であってさえ当てはまることと思われる。私たちの自己意識を「自己が世界に対していることについての意識」と捉えることは、こうした私たち自己の世界に対するありかたが、時間的な持続を伴っていることにも目を向けやすくしてくれるのである。

形式的な仕方でもとめるならば、自己意識は、単に自己を意識するのではなく、自己が世界に対していることについての意識である。そして、この自己は、心的な仕方であると同時に身体的な仕方でも、世界に対しているのである。そして、身体が空間的な延長をもって世界内に存在しているのと同様に、時間的な延長をもって自己は世界内に存在しているのである。